

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 10-226614

(43)Date of publication of application : 25.08.1998

(51)Int.Cl.

A61K 7/00

A61K 7/043

(21)Application number : 09-049717

(71)Applicant : POLA CHEM IND INC

(22)Date of filing : 18.02.1997

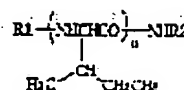
(72)Inventor : HANABUSA KENJI
HIRATSUKA KAORI
SHIRAI HIROYOSHI
IYANAGI KOICHI

(54) ISOLEUCINE DERIVATIVE-CONTAINING COMPOSITION

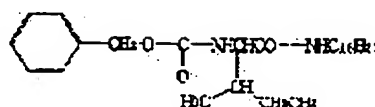
(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To obtain an isoleucine-containing composition that can improve stability thereof, particularly the stability at a temperature near the body by admixing a specific compound to medicines, cosmetics, food products and the like.

SOLUTION: An isoleucine (or its anhydride) and an amine responding to the compound to be prepared are subjected to condensation reaction using a peptide synthesis reagent, then the free amino groups are acylated, when necessary, and purified, when necessary, to prepare the objective isoleucine derivative of formula I [R1 is H, (subjected) benzyloxycarbonyl; R2 is a 8-22C including cyclic structures) straight or branched chain alkyl, alkenyl; n is 1-8]. typically N-(benzyloxycarbonyl) isoleucine stearylamide of formula II. This compound is admixed to cosmetics, medicines and the like, particularly of high content of oily component. The amount of the compound of formula I is preferably 0.1-100 pts.wt. per 1 pt.wt. of the oily component.



I.



II

LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 10.12.2001

[Date of sending the examiner's decision of rejection] 24.09.2003

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平10-226614

(43) 公開日 平成10年(1998) 8月25日

(51) Int.Cl.⁶

識別記号

F I

A 6 1 K 7/00
7/043A 6 1 K 7/00
7/043

C

審査請求 未請求 請求項の数 3 F D (全 10 頁)

(21) 出願番号

特願平9-49717

(22) 出願日

平成9年(1997) 2月18日

(71) 出願人 000113470

ポーラ化成工業株式会社
静岡県静岡市弥生町6番48号

(72) 発明者 英 謙二

長野県上田市常田3丁目15番1号 信州大
学繊維学部内

(72) 発明者 平塚 香織

長野県上田市常田3丁目15番1号 信州大
学繊維学部内

(72) 発明者 白井 汪芳

長野県上田市常田3丁目15番1号 信州大
学繊維学部内

最終頁に続く

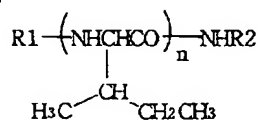
(54) 【発明の名称】 イソロイシン誘導体を含有する組成物

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】 安定性、取り分け40℃付近の高温における安定性に優れた医薬品、化粧品、食品等の組成物を提供することを課題とする。

【解決手段】 一般式(1)に表されるイソロイシン誘導体を化粧品、医薬、食品等の組成物に含有させる。

【化1】



れた医薬品、化粧品、食品等の組成物を提供することが可能である。

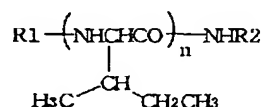
一般式(1)

(但し、R1は水素原子又は置換基を有することが可能なベンジルオキシカルボニル基を表し、R2は炭素数8～22の環状構造を含むことのできる直鎖又は分岐のアルキル基又はアルケニル基を表し、nは1～8の整数を表す。) 本発明によれば、安定性取り分け40℃付近の体温における安定性と5～10℃における使用性に優

【特許請求の範囲】

【請求項1】 一般式（I）に表されるイソロイシン誘導体を含む組成物。

【化1】

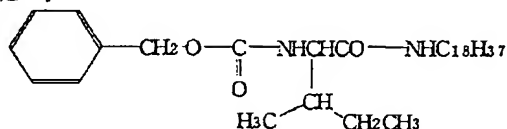


一般式（I）

（但し、R1は水素原子又は置換基を有することが可能なベンジルオキシカルボニル基を表し、R2は炭素数8～22の環状構造を含むことのできる直鎖又は分岐のアルキル基又はアルケニル基を表し、nは1～8の整数を表す。）

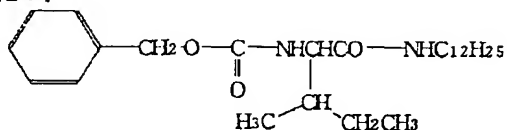
【請求項2】 一般式（I）に表される化合物が、N-（ベンジルオキシカルボニル）イソロイシンステアリルアミド（化合物1）、N-（ベンジルオキシカルボニル）イソロイシンラウリルアミド（化合物2）又はペンタイソロイシンステアリルアミド（化合物3）である、請求項1に記載の組成物。

【化2】



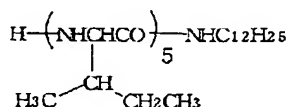
化合物1

【化3】



化合物2

【化4】



化合物3

【請求項3】 化粧品又は医薬である請求項1又は2に記載の組成物。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明が属する技術分野】 本発明は、オイル等の流動性有機物の増粘・ゲル化に好適なイソロイシン誘導体を含む組成物に関する。

【0002】

【従来の技術】 化粧品、医薬品、食品などの分野で、これらの製剤の粘度や硬度を高くすることは安定性を確保

する意味で非常に重要なことであった。このような硬度や粘度を高める手段としては、増粘剤を用いる方法やワックス等のワックス構造を利用する方法がある。しかしながら、増粘剤はアルキルアクリレートコポリマー等の水溶性のものが知られているのみであり、坐剤やリップカラー等のオイルゲル系には適用しにくかった。ワックスの構造を利用する方法では、ワックスのつくる構造が温度に対して弱いため、40℃付近の体温域で安定性を向上するためにはワックス量が多くなりすぎ、のびが重い、化粧品がムラづきする、肛門などに挿入すると痛かったり、異物感がひどい等と使用性を損なうことが少なくなかった。又、有機成分のゲル化剤として12-ヒドロキシステアリン酸が知られているが、このものはゲルを形成するか溶液になるかの何れかの状態しか提供できず、粘度をコントロール事が困難であった。即ち、使用性を損なうことなく、体温付近の温度で系を安定化する手段が求められていた。

【0003】 一方、後記一般式（I）に表される化合物は既知の化合物であって、これらの化合物が流動性を有する有機物質に対してゲル化作用を発揮することは知られていたが、化粧品や医薬に含有させると、その安定性が向上することは全く知られていない。

【0004】

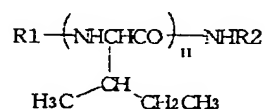
【発明が解決しようとする課題】 本発明はこの様な状況下に為されたものであって、安定性取り分け40℃付近の高温における安定性に優れた医薬品、化粧品、食品等の組成物を提供することを課題とする。

【0005】

【課題を解決するための手段】 本発明者らはこのような状況に鑑み、化粧品や医薬など油性成分を含有する組成物の体温付近の温度（40℃付近）に於ける安定性を、使用感を損なうことなく向上させる手段を求めて鋭意研究を重ねた結果、次に示す一般式（I）に表される化合物群がそのような性質を有していることを見いだした。更にこれを医薬品、化粧品、食品等の組成物に配合することにより組成物の体温付近の温度における安定性を向上させることを見いだした。更に検討を重ねた結果、粘度の温度に対する変化が少なく、5～10℃でかかる組成物を使用しても使用性を損なわないことを見だし発明を完成させるに至った。以下、本発明について発明の実施の形態を中心に詳細に説明する。

【0006】

【化5】



一般式（I）

（但し、R1は水素原子又は置換基を有することが可能なベンジルオキシカルボニル基を表し、R2は炭素数8～

22の環状構造を含むことのできる直鎖又は分岐のアルキル基又はアルケニル基を表し、nは1～8の整数を表す。）

【0007】

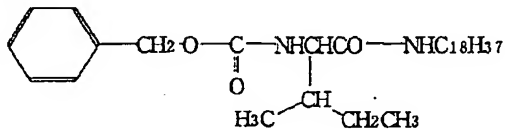
【発明の実施の形態】

(1) 本発明の組成物に含有される一般式(1)に表される化合物

本発明の組成物に含有される化合物は上記一般式(1)に表される構造を有する。このような化合物の好ましい例としては、例えば、N-(ベンジルオキシカルボニル)イソロイシンステアリアルアミド(化合物1)、N-(ベンジルオキシカルボニル)イソロイシンラウリアルアミド(化合物2)、ペンタイソロイシンステアリアルアミド(化合物3)、N-(ベンジルオキシカルボニル)イソロイシンオレイルアミド(化合物4)、N-(ベンジルオキシカルボニル)イソロイシンイソオクチルアミド(化合物5)、N-(4-メトキシベンジルオキシカルボニル)ペンタイソロイシンステアリアルアミド(化合物6)等が挙げることができる。これらの内、特に好ましいものは、化合物1～3である。

【0008】

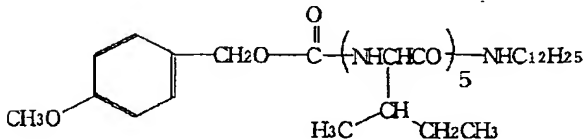
【化6】



化合物5

【0013】

【化11】



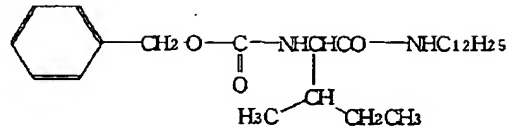
化合物6

【0014】 本発明の化合物は何れも既知の化合物より、製造することができる。これらの化合物は例えば次に示す方法で製造すればよい。即ち、対応するイソロイシン或いはイソロイシン無水物とアミンとをDDC等のペプチド合成試薬を用いて縮合させれば、R1が水素原子である化合物が得られる。しかる後に遊離のアミノ基をアシル化剤でアシル化すればR1がアシル基である化合物を得ることが出来る。この反応の生成物は再結晶や

*化合物1

【0009】

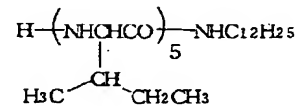
【化7】



化合物2

10 【0010】

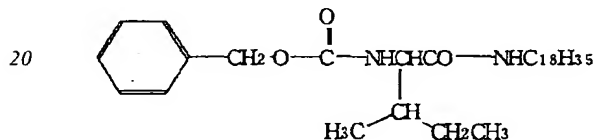
【化8】



化合物3

【0011】

【化9】

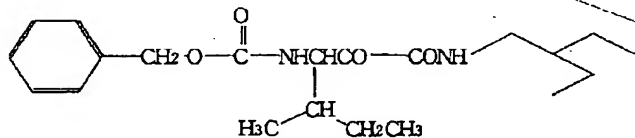


化合物4

【0012】

【化10】

*



カラムクロマトグラフィー等の通常の精製手段で精製することができる。

【0015】 <製造例1>

化合物1の合成

25gのL-イソロイシンと7.70gの水酸化ナトリウムを水70mlに溶かし、70mlのエーテルを加えた。氷冷下攪拌しながらベンジルオキシカルボニルクロリド(クロル蟻酸ベンジル)32.4gを加え、続いて水酸化ナトリウム7.7gを50mlに溶かして加えた。その後、室温に戻し、更に一時間攪拌した。水相を塩酸で中和し、エーテルで抽出し、濃縮した。残渣をエーテルと石油エーテルの混合液に溶解させ、ジシクロヘキシルアミン33.8gを加え、冷却して析出した結晶を集めた。結晶は同定の結果、N-(ベンジルオキシカルボニル)イソロイシンのジシクロヘキシルアミン塩であった。このN-(ベンジルオキシカルボニル)イソロイシンジシクロヘキシルアミン塩23.4gに100m

1のエーテルと100mlの2N-硫酸を加え、エーテル抽出した。エーテル相を乾燥後濃縮し、150mlの酢酸エチルを加えた。加熱溶解させた後、DCC12.01gと14.26gのステアリアルアミンとを加え、60℃で3時間反応させた。温度が下がらないようにしながら析出した結晶を濾過で除き、母液を冷却させ結晶を析出させこれを濾取し酢酸エチルから再結晶し化合物1を20.1g(収率74%)で得た。

【0016】<製造例2>

化合物2の合成

製造例1のステアリアルアミンをラウリルアミンに変えて同様に処理し、化合物2を収率15%で得た。

【0017】<製造例3>

化合物3の合成

13.12gのL-イソロイシンを200mlのテトラヒドロフランに懸濁させ、イソロイシンが溶けるまでホスゲンを吹き込み、減圧濃縮し、残渣をノルマルヘキサンで洗浄したのち、ヘキサン5部とエーテル1部の混合液から再結晶しN-カルボキシー-L-イソロイシン無水物を得た。4.79gのステアリアルアミンを200mlのテトラヒドロフランに溶かし、N-カルボキシー-L-イソロイシン無水物13.87gを加え室温で12時間反応させた。形成したゲルを80℃で減圧乾燥しノルマルヘキサンで洗浄して、乾燥させ化合物3を4.31g(収率73%)で得た。

【0018】<製造例4>

化合物4の合成

製造例2のラウリルアミンをオレイルアミンに変えて同様に操作し、収率13%で化合物4を得た。

【0019】<製造例5>

化合物5の合成

製造例2のラウリルアミンをイソオクチルアミンに変えて同様に操作し、収率19%で化合物5を得た。

【0020】<製造例6>

化合物6の合成

化合物3の1gをトリエチルアミン200mlに加え、これにp-メトキシベンジルオキシカルボニルクロリド1gを加え室温で24時間攪拌し、減圧濃縮し、シリカゲルカラムで精製し化合物6を収率25%で得た。

【0021】かくして得られた本発明の組成物に含有される化合物は何れも流動性を有する有機物質乃至は組成物を増粘及び／又はゲル化させる作用に優れる。この作用により、医薬品、化粧品、食品などの組成物を安定化することができる。この作用は40℃付近の高温域でも同様に視測される。本発明を用いて有機物質乃至は組成物を増粘及び／又はゲル化させるには、当該有機物質乃至は組成物1重量部に対して0.1～100重量部、より好ましくは0.5～90重量部、更に好ましくは1～80重量部を加え加熱して相溶させれば良い。この場合、本発明の化合物は唯1種のみを用いても良いし2種

以上を用いても良い。本発明の化合物が増粘及び／又はゲル化しうる有機物質としては、例えば、四塩化炭素、テトラヒドロフラン、ヘキサン、シクロヘキサン、ベンゼン、トルエン、クロロベンゼン、ピリジン等のような有機溶剤類、ケロシン、ガソリン、軽油、重油等の燃料、オリーブ油、大豆油、コーン油、ヒマシ油、牛脂、ホホバ油等の動植物油、スクワラン、流動パラフィン等の鉱物油、ジメチルポリシロキサンやメチルフェニルポリシロキサン等のシリコーン類、オレイン酸オクチルデシル、グリセリルトリイソオクタネート、ネオペンチルグリコールジイソオクタネート等の合成エステル類が例示できる。これらの内、本化合物は従来ではゲル化させ難かった流動パラフィンやスクワラン等の炭化水素類や環状ジメチルシリコーンやジメチコン等をゲル化しうる。従って、これらの成分を含有する化粧品や医薬の安定化に本化合物は好適に用いられる。更にペイント、食品等も一般式(1)に表される化合物を含有させて安定化させることのできる組成物として例示できる。下記に増粘・ゲル化作用を試験例として示す。

20 【0022】<試験例>

増粘・ゲル化作用

試験管に各種有機成分を1cm³秤りとり、これに上記化合物の代表として化合物1、3を加え混合し、相溶するまで加熱攪拌した。相溶したものを25℃まで冷却し、ゲル化しているか否かを肉眼で判定した。結果を表1に示す。化合物1及び3は有機物質をゲル化する作用に優れることが判る。

【0023】

【表1】

30

有機成分	化合物1	化合物3
グリセリルトリイソオクタネート	半透明ゲル	粘性増加
スクワラン	半透明ゲル	粘性増加

【0024】(2) 本発明の組成物

本発明の組成物は上記一般式(1)に表される化合物を含有することを特徴とする。本発明の組成物としては、例えば、医薬、化粧品、食品等が例示できる。これらの組成物では、化粧品と医薬が好ましく、更に化粧品と医薬の中でも油性成分を多く含むもので、例えばオイルゲル製品、油中水乳化製品などが例示できる。具体的な好ましい例としては、例えば医薬であれば、坐剤、油中水乳化皮膚外用剤、リピッド製剤、リポソーム製剤等が例示でき、化粧品であればリップカラー、アイライナー、リップクリーム、ファンデーション等のオイルゲル製品、マニキュア、ペディキュア、ネイルコート等の含有有機溶剤製剤、クリーム、ファンデーション等の油剤含有量が多い乳化製剤などが例示でき、食品としては、チョコレート、バター、マーガリン等の油脂製品などが例示

できる。勿論、クレヨン、鉛筆等の文房具やシーリング剤等のような建設用品に応用することも可能であり、これらも本発明の組成物の範囲にある。

【0025】本発明の組成物における一般式(1)に表される化合物の好ましい含有量は、増粘作用が期待できる量であれば良く、従って、油性成分1重量部に対して0.1～100重量部、より好ましくは0.5～90重量部、更に好ましくは1～80重量部であり、組成物全体に対しては0.01～20重量%であり、よりに好ましくは0.05～18重量%であり、更に好ましくは0.1～16重量%である。本発明の組成物に於いては、一般式(1)に表される化合物は唯1種を含有させても良いし、2種以上を組み合わせる含有させても良い。本発明の組成物に於いては、上記一般式(1)に表される化合物以外に、これら組成物で用いられている任意成分を含有することができる。かかる任意成分としては、例えば、ワセリンやマイクロクリスタリンワックス等のような炭化水素類、ホホバ油やゲイロウ等のエステル類、牛脂、オリーブ油等のトリグリセライド類、セタノール、オレイルアルコール等の高級アルコール類、ステアリン酸、オレイン酸等の脂肪酸、グリセリンや1,3-ブタンジオール等の多価アルコール類、非イオン界面活性剤、アニオン界面活性剤、カチオン界面活性剤、両性界面活性剤、エタノール、カーボポール等の増粘剤、防曇剤、紫外線吸収剤、抗酸化剤、色素、粉体類、

甘味剤、酸味剤等が例示できる。本発明の組成物は一般式(1)に表される化合物によって40℃付近の体温域でも安定であり、更に5～10℃でも使用性を損なわない。

【実施例】以下に実施例を示して本発明について更に詳細に説明するが、本発明がこれら実施例にのみ限定を受けないことは言うまでもない。

【0026】＜実施例1～4＞

配合例

10 下記の表2に示す処方に従ってファンデーションを作成した。即ち粉体成分をヘンシェルミキサーで混合した後、パルペライザーで粉碎し、これをダブルブラネタリーミキサーに入れその他の成分を溶解して加え、加熱しながら混練りし金皿に詰め加熱プレスしファンデーションを得た。併せて、このものを40℃に3カ月保存した場合の観察結果を示した。本発明の組成物は安定性を向上していることが判る。尚、評価基準は++：著しい、+：明らかに観察できる、±：僅かに見られる、-：全く見られないであった。又、5℃における使用性も専門パネラーにより評価してもらった。結果をあわせて表2

20 に示す。本発明の組成物は低温での使用性も良いことが判る。

【0027】

【表2】

成分	実施例1	実施例2	実施例3	実施例4	比較例
グリセリルトリイソステアレート	10	10	10	10	10
ホホバ油	10	10	10	10	10
ジメチコン	10	10	10	10	10
カルナバワックス	10	10	10	10	10
化合物1	1				
化合物2		1			
化合物3			1		
化合物4				1	
12-ヒドロキシステアリン酸 (粉体)					1
マイカ	19	19	19	19	19
タルク	10	10	10	10	10
二酸化チタン	10	10	10	10	10
黄色酸化鉄	5	5	5	5	5
ベンガラ	2	2	2	2	2
ナイロンパウダー	13	13	13	13	13
40℃保管 オイル分の残ソウ	-	±	-	±	+
重量の減少	-	-	-	-	±
5℃の使用性					
化粧料の取れ	良い	良い	良い	良い	悪い
肌への伸び	良い	良い	良い	やや良い	悪い

【0028】＜実施例5～8＞表3に示す処方に従ってクリームを作成した。即ち、ア、イ、ウ、エをそれぞれ80℃で加熱溶解又は分散し、アとイを混練りし、これをウで希釈し、更にエを徐々に加え乳化した。これを攪拌冷却しクリームを得た。併せて、このものを40℃に3カ月保存した場合の観察結果を示した。本発明の組成物は安定性を向上していることが判る。尚、評価基準は

++：著しい、+：明らかに観察できる、±：僅かに見られる、-：全く見られないであった。又、5℃における使用性も専門パネラーにより評価してもらった。結果をあわせて表3に示す。本発明の組成物は低温での使用性も良いことが判る。

【0029】

【表3】

成分	実施例5	実施例6	実施例7	実施例8	対照例
ア					
70%マルチース水溶液	6	6	6	6	6
プロピレングリコール	5	5	5	5	5
メチルパラベン	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
ブチルパラベン	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
イ					
トリセロール					
イソステアレート	4	4	4	4	4
ウ					
流動パラフィン	25	25	25	25	30
化合物1	5				
化合物2		5			
化合物3			5		
化合物4				5	
エ					
水	54.7	54.7	54.7	54.7	54.7
40℃保管					
オイル分の離シ	—	—	—	±	+
分離	—	—	—	—	±
5℃の使用性					
化粧料の取れ	良い	良い	良い	良い	悪い
肌への伸び	良い	良い	良い	良い	悪い

【0030】＜実施例9～12＞表4の処方に従って口紅を作成した。即ち、アをボールミルで分散し、90℃に加熱した。一方予め90℃に加熱溶解・分散しておいたイを加え良く混合し型に流し込み、冷却し容器に装着し口紅を作成した。併せて、このものを40℃に3カ月保存した場合の観察結果を示した。本発明の組成物は安定性を向上していることが判る。尚、評価基準は++：

著しい、+：明らかに観察できる、±：僅かに見られる、—：全く見られないであった。又、5℃における使用性も専門パネラーにより評価してもらった。結果をあわせて表4に示す。本発明の組成物は低温での使用性も良いことが判る。

【0031】

【表4】

13

14

成分	実施例 9	実施例 10	実施例 11	実施例 12	比較例
ア					
ベンガラ	10	10	10	10	10
黄色 4 号 A 1	5	5	5	5	5
虹彩箔	2	2	2	2	2
着色チタンマイカ	3	3	3	3	3
ひまし油	10	10	10	10	10
流動パラフィン	20	20	20	20	20
イ					
モクロウ	10	10	10	10	10
カルナウバワックス	10	10	10	10	30
マイクロクリスタリックス	10	10	10	10	10
化合物 1	20			10	
化合物 2		20			
化合物 3			20		
化合物 4				10	
40℃保管					
オイル分の離シウ	—	—	—	±	+
金皿からの剥がれ	—	—	—	±	+
5℃の使用性					
色味ののり	良い	良い	良い	良い	大変悪い
肌への伸び	良い	良い	良い	良い	大変悪い

【0032】＜実施例 13～16＞下記表 5 の処方に従って坐剤を作成した。即ち処方成分を加熱溶解分散させ、型に流し込み冷却固化させて坐剤を得た。又、使用性（下着の汚れと異物感）を専門パネラーにより判定し

てもらった。結果を表 5 に併せて記す。本発明の組成物が使用感に優れることが判る。

【0033】

【表 5】

成分	実施例 13	実施例 14	実施例 15	実施例 16	対照例
トリエチレングリコールモノステアレート	98	98	98	98	99
インドメタシン	1	1	1	1	1
化合物 1	1				
化合物 2		1			
化合物 3			1		
化合物 4				1	
下着の汚れ	無い	無い	無い	ややある	ある
異物感	無い	無い	無い	無い	ある

【0034】＜実施例 17～18＞表 6 に示す処方に従ってクリームを作成した。即ち、ア、イ、ウ、エをそれぞれ 80℃で加熱溶解又は分散し、アとイを混練りし、これをウで希釈し、更にエを徐々に加え乳化した。これを攪拌冷却しクリームを得た。併せて、化粧料が茶碗などを汚すか否かについて、専門パネラーにより評価してもらった。結果をあわせて表 6 に示す。本発明の組成物は付着性が抑制されていることが判る。

【0035】

【表 6】

15

成分	実施例17	実施例18
ア		
70%マルチール水溶液	6	6
プロピレングリコール	5	5
メチルパラベン	0.2	0.2
ブチルパラベン	0.1	0.1
イ		
トリグリセロール		
イソステアレート	4	4
ウ		
流動パラフィン	25	25
化合物1	5	
化合物2		5
エ		
水	54.7	54.7
他の物への付着性		
茶碗	殆どなし	殆どなし
タバコのフィルター	殆どなし	殆どなし

16

*【0036】＜実施例19～22＞

製造例

下記表7に従ってファンデーションを作成した。即ち、イ、ロ、ハ、ニをそれぞれ秤り、イを良く混練りし、ロを加えて希釈した後80℃に加熱した。これにニを分散させ、更に、別途80℃に加熱したハを徐々に加え乳化し、攪拌冷却してファンデーションを得た。このものを40℃の恒温室に3カ月保存した場合の状態の変化をあわせて記す。尚、化合物1～4を水に置換した対照例は

10

40℃2カ月で一部分離していた。これより本発明の組成物であるファンデーションは、通常安定性が優れているとされてきた対照例よりも、更に高温での安定性に優れることが判る。

【0037】

【表7】

20

*

成分	実施例19	実施例20	実施例21	実施例22
イ				
70%マルチール水溶液	10	10	10	10
1,3-ブタンジオール	5	5	5	5
トリグリセロールイソステアレート	5	5	5	5
メチルパラベン	0.3	0.3	0.3	0.3
ブチルパラベン	0.1	0.1	0.1	0.1
化合物1	1			
化合物2		1		
化合物3			1	
化合物4				1
ロ				
流動パラフィン	5	5	5	5
軽質イソパラフィン	15	15	15	15
カルナウバワックス	3	3	3	3
ハ				
水	40.6	40.6	40.6	40.6
ニ				
二酸化チタン	8	8	8	8
タルク	4	4	4	4
黄色酸化鉄	2.5	2.5	2.5	2.5
ベンガラ	0.5	0.5	0.5	0.5
40℃の安定性	良好	良好	良好	良好

【0038】＜実施例23～26＞

50 配合例

下記表8に示す処方に従ってネイルカラーを作成した。
即ち、イをロに一樣に分散・溶解させ、これにハを攪拌しながら加え均一に分散・溶解させ、予め混合・粉碎しておいたニを加えて均一に分散させ容器に詰めネイルカラーとした。尚、併せて40℃、3カ月の保存試験結果*

*果も併せて記す。対照例は化合物1～4をベントナイトに置換した物を用いた。これらの結果より、本発明の組成物であるネイルカラーは安定性に優れることが判る。

【0039】

【表8】

成分	実施例23	実施例24	実施例25	実施例26	対照例
イ					
化合物1	0.5				
化合物2		0.5			
化合物3			0.5		
化合物4				0.5	
ロ					
酢酸エチル	20	20	20	20	20
酢酸ブチル	27	27	27	27	27
イソプロパノール	2	2	2	2	2
トルエン	20	20	20	20	20
ハ					
ニトセルロース1/4	15	15	15	15	15
変性アルキッド樹脂	10	10	10	10	10
フタル酸ジブチル	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8
1,3-ブタンジオール	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
ニ					
顔料又は色剤	1	1	1	1	1
有機ベントナイト	0.6	0.6	0.5	0.5	1
40℃3カ月安定性	良好	良好	良好	良好	分離

【0040】

【発明の効果】本発明によれば、安定性取り分け40℃付近の体温における安定性と5～10℃における使用性 30

に優れた医薬品、化粧品、食品等の組成物を提供することが可能である。

フロントページの続き

(72)発明者 井柳 宏一

神奈川県横浜市戸塚区柏尾町560 ポーラ
化成工業株式会社戸塚研究所内